

塾長賞 受賞者 *学部・学年は受賞当時のもの

平成2年度

佐々木裕介君（経済学部4年）

ラクロスという競技の国内普及と国際交流に尽力し、海外から高い評価。

田中章義君（総合政策学部1年）

角川短歌賞に輝き、短歌集を刊行。

平成3年度

松田浩君（経済学部1年）

第65回国画展覧会において、絵画の部最年少入選。

鈴木隆太郎君（法学部法律学科1年）

第3回東京キャンパス・フォーラム記念学生論文最優秀賞受賞。

大西直樹君（法学部法律学科3年）

平成3年度司法試験において最年少合格（20歳）。

勝浦大達君（法学部法律学科3年）

第41回全日本学生法律討論会立論の部優勝。

林秀光君（法学部政治学科2年）

第4回東京六大学弁論大会において、外国人留学生（中国福建省出身）でありながら、言葉の壁を克服して優勝。

平成4年度

木村俊博君（環境情報学部3年）

朝日スピーチコンテスト第31回コンクール・ド・フランセ決勝大会（朝日新聞社主催）優勝。

竹内紀彦君（総合政策学部3年）

第1回スカラシップ・夢・フューチャーズ'91（大阪新聞社主催）通商産業大臣奨励賞受賞をはじめいくつかの論文賞受賞。

増子聡君（法学部法律学科3年）

米国在住日本人留学生に対するカウンセリング活動をはじめ幅広く後輩の指導にあたり、国際理解のため長期にわたり多くのボランティア活動に従事し、多様な社会的貢献を行う。

納谷麻里子君（法学部法律学科3年）

平成4年度司法試験に身体的困難を克服して最年少合格を果たす。

谷口伸君（文学部4年）

第8回ニッカ・十五夜物語新人賞第1位に音楽大学出身者以外から初めて入賞。

平成5年度

金子万里子君（法学部法律学科3年）

律法会ならびに英語会で後進の指導にあたりつつ、平成5年度外務公務員採用 種試験に最年少合格。

松原晶子君（法学部法律学科4年）

平成4年度司法試験に最年少合格したにもかかわらず、社会福祉に献身するため、平成5年度国家公務員採用 種試験に合格。

樋口真佳君（総合政策学部4年）

第47回全国学生英語弁論大会（毎日新聞社主催）において優勝。

平成6年度

山本謙治君（環境情報学部4年）

世界的農業情報ネットワークシステムを開発し、これを用いた学生農園を開設。農業に新しい天地を開拓した。

銭行君（経済学部3年）

ラジオ番組の企画・制作の中心となり、中国人留学生として日中文化交流に積極的に貢献。

平成7年度

<塾長賞>

依典和君（総合政策学部4年）

第11回佐藤栄作賞（佐藤栄作記念国連大学協賛財団主催）において、「創設20周年を迎える国連大学に世界が期待する役割」と題する論文で最優秀賞を受賞。また、その他多くの優れた論文を発表。

<塾長奨励賞>

竹内真君（法学部政治学科4年）

第44回毎日児童小説（毎日新聞社主催）最優秀賞、第2回三田文学新人賞（三田文学会・慶應義塾大学主催）をはじめ、いくつかの文学賞を獲得。

森 千香子君（文学部3年）

朝日スピーチコンテスト第34回コンクール・ド・フランス決勝大会（朝日新聞社・朝日イブニングニュース主催）優勝。

ユースホステルクラブ（代表：植竹和博君（理工学部3年））

四半世紀にわたって、重度障害を持つ子供達の施設との交流を続ける。

人体ウォークスルー研究グループ（松田達樹君（政策・メディア研究科1年）他11名）

遺伝子・臓器等を3次元コンピュータグラフィックスで見ることができる、中高生を対象とした人体の教育ソフトウェアを製作。

平成8年度

山川総司君（政策・メディア研究科修士課程2年）

長年、コンピュータ・グラフィックスの研究開発に取り組み、その成果を応用したソフトウェアおよび著書が各方面から高い評価。

中沢雅都君（環境情報学部4年）

マレー語とマレーの文化・歴史について研究・研鑽を重ね、第4回マレー語国際弁論大会（アセアン以外の部）において優勝。

伊藤珠実君（政策・メディア研究科修士課程2年）

笙の演奏において国際的に活躍するだけでなく、作曲においても高い評価を得るとともに、海外誌に論文を発表するなどの成果を挙げ、さらに超音波の感性への影響の研究に挑戦。

田所淳君（政策・メディア研究科修士課程2年）

コンピュータ音楽という新分野に取り組み、その作品が International Computer Music Conference において高く評価。

平成9年度

<塾長賞>

末國誠君（経済学部1年）

全日本選手権大会を勝ち抜き、日本代表として出場の「第21回世界オセロ選手権大会」において優勝した。

河原慶君（商学部2年）

自ら生計を立て学業に勤しむなど、独立自尊の精神を発揮しつつ、将棋に取り組み、「第53回学生名人戦」において優勝した。

多田匠君（理工学部3年）

「第19回全日本学生囲碁名人戦」および「第41回全日本学生本因坊戦」において優勝、学生三冠のうちの二冠を制した。

水野隆元君（環境情報学部3年）

ハーモニカ界最大の「WORLD HARMONICA FESTIVAL 1997」において個人部門1位・トリオ部門3位の栄誉に輝いた。

西村拓士君（理工学研究科博士課程 1 年）

純粋数学から計算機科学にわたる幅広い知識・技術を基礎として、擬似乱数生成アルゴリズムの共同開発をなしとげ、国際的に高い評価を受けた。

< 塾長奨励賞 >

陳秀玲君（文学部 3 年）

留学生講師として、主に首都圏の公立小・中・高等学校において国際理解教育の実践に参加し、生徒達に希望・夢・自信を与える役割を果たした。

平成 10 年度

< 塾長賞 >

杉山雄一君（政策・メディア研究科修士課程 2 年）

コンピューター・ゲームソフト X I（サイ）を企画開発し、国内のみならず欧米でも高い評価を得るに至った。この活躍は豊かな発想力と、それを実現する技術力を広く示すものである。

井庭崇君（政策・メディア研究科修士課程 2 年）

福原義久君（政策・メディア研究科修士課程 1 年）

科学の諸分野の最先端を支えつつある複雑系に関する広範な共同研究を行い、その成果を、著書「複雑系入門」に集約して出版した。同書は、複雑系の概念の普及に大いに寄与するものと、高い評価を受けた。

< 塾長奨励賞 >

吉田恵美子君（総合政策学部 4 年）

第 37 回コンクール・ド・フランセに出場して「漫画の使い方」という題で、フランスの文学作品の漫画化にかかる論争に対して自説を明解に展開し、優勝の栄誉に輝いた。同君は、日本の若者、とりわけ塾生のフランス文化理解の深さと水準の高さを示すものである。

平成 11 年度

< 塾長賞 >

天野恵君（総合政策学部 2 年）

湘南藤沢キャンパス秋祭で開催されたアート展「1999 展」のプロデューサーとして企画を成功に導いた。この企画はインターネットを利用した新しい形のアート展であることに加えて、学生が主体的に企画運営した試みとして高く評価できる。同君の活躍は豊かな発想力と企画実現にむけた努力であると考えられる。

深尾太郎君（医学部 4 年）

樹状細胞に関する分子生物学上の最先端の研究に従事され、樹状細胞がガンマ型インターフェロンを生産するという事実を世界で初めて発見した。この研究成果は世界的に高く評価された。大学学部の学生が最も重要な研究課題を設定し、最も高度な研究を遂行し、世界の学界に大いなる貢献をした。

木下修平君（理工学研究科修士 2 年）

ソフトウェア上のエージェントがサッカーゲームを行うプログラム「11Monkeys」を開発し出場したロボカップジャパンオープン 99 シミュレーションリーグにおいて優勝し、引き続きストックホルムで行われた第 3 回世界大会でも上位に入賞される成果をあげた。学部卒業以来の研究を継続・発展させてきた同君の地道な努力である。

慶應義塾大学公認学生団体 将棋研究会

任田有孝君（経済学部 3 年）・高野卓大君（環境情報学部 4 年）

岩本健君（理工学部 3 年）・古田龍生君（環境情報学部 3 年）

葛山拓生君（理工学部 1 年）

礼節と精神と洞察力を重んずる将棋という伝統ある競技に真摯な努力を重ね、立派な学生団体を育てあげた。第 30 回全日本学生将棋団体対抗戦において全勝して全国初制覇を成し遂げ、第 12 回アマチュア将棋団体日本選手権では、初優勝を飾る。

< 塾長奨励賞 >

吉崎明彦君（文学部 3 年）

古書検索のためのホームページ「古本屋さんに行こうよ！」を開発作成し、多くの人々の利用に供する貢献をした。それは古書検索にとどまらずインターネットを用いて古書の世界を再生する試みとして高い評価を得ている。日頃書籍の世界に深い関心を持ち続けてきた同君の地道な努力の成果である。

平成 12 年度

< 塾長賞 >

宮坂太郎君（文学部 4 年）・小林倫子君（文学部 4 年）

自殺に追い込まれていった若者とその遺族や友人たちの心の軌跡を取材し、地道な編集作業を経て『遺書』を出版した。同書は若者の犯罪や自殺に対する提言として大きな社会的影響を持つ。同世代の若者たちに生きることと青春への率直なアピールをした。

鈴木亜由子君（医学部 5 年）

マウス腫瘍モデルにおいて、腫瘍細胞のみを破壊して複製する変異ヘルペスウイルスと癌に対する免疫強化因子であるインターロイキン 12 をともに腫瘍内に投与すると、高い抗腫瘍効果が誘導されることを発見。同君の研究は癌に対する新しい遺伝子治療の途を拓く研究として称賛に値するものである。

服部典子君（医学部 6 年）

抗リン脂質抗体症候群という原因不明の難病に関する基礎研究に従事し、病態を誘導している自己反応性 T 細胞の存在を世界で初めて証明。この研究成果を日本リウマチ学会、アメリカリウマチ学会で発表し国際的に注目を受けた。

< 塾長奨励賞 >

的場由木君（看護短期大学 3 年）

路上生活者の支援ボランティア「ふるさとの会」の会員として路上生活者のための支援活動を実践。このような献身的社会活動はナイチンゲールの誓いを我が心とする崇高な奉仕活動である。

濱田雄君（環境情報学部 4 年）・閑歳孝子君（環境情報学部 4 年）

笠谷真也君（環境情報学部 4 年）・寺島幹人君（環境情報学部 3 年）

齊藤達也君（環境情報学部 3 年）・松村太郎君（環境情報学部 2 年）

湘南藤沢キャンパスにおいて、仮想空間コミュニティ「SFC MODE」をインターネット上に構築し、キャンパスを利用する学生や教員に対してコミュニケーション及び学術活動を支援する基盤を創造した。学生による高度で実用的なサイト構築は内外に大きな注目を集めた。

平成 13 年度

< 塾長賞 >

神山淳君（医学部 6 年生）

骨髄間質細胞に関する本塾医学部のプロジェクトにおいて従来知られていた分化形質とはまったく違う外胚葉由来の神経細胞への分化に世界で最初に成功。また本研究は患者自身の細胞による再生医療の分野でも倫理的、臨床的に重要な知見であるとの高い評価を受けており、称賛に値するものである。

山本晃士君（環境情報学部 4 年）

日本のデザイン界において最も権威と実績があり、且つ海外からも高く評価されている ADC 賞を受賞し、同時に原弘賞も受賞。同時受賞・学生による受賞とも初めてのことであり、日本中のプロを相手にしてのこの結果は素晴らしいものと言える。

< 塾長奨励賞 >

中山拓郎君（法学部政治学科 4 年）

日本ウオーキング協会並びに読売新聞社共催による「アメリカ横断ウオーク 2001」に応募し、2,600 人の応募者の中から 3 度の試験を経て合格、3 月から 9 月にかけて大陸横断を断行し踏破に成功。そして滞在中各地で交流イベントに参加し、サンフランシスコ講和条約 50 周年式典にも出席するなど日米親善に貢献。

磯貝日月君（総合政策学部2年）

2度にわたる極寒のカナダ・ヌナブト準州を中心としたフィールドワークの記録とSFC・AO入試についての体験を基に「ヌナブト イヌイットの国その日その日 テーマ探しの旅」を出版。イヌイットという少数民族についての詳細な報告だけでなくAO入試の成功例を示した。

佐藤知一君（総合政策学部2年）

スリランカ住民自立のための職業訓練指導及び職業訓練学校設立と運営について中心となって活動を進め、農村部の学校運営を住民自身が100%独立しておこなっていく道筋をつけることに成功。

洪由姫君（総合政策学部4年）

日頃の研鑽と、積極的にテーマを設定し分析考察する努力によって、第4回全国ドイツ語スピーチコンテスト優勝の栄誉に輝いた。これはドイツ文化の深い理解とドイツ語の会話能力が高く評価されたものである。

平成14年度

<塾長賞>

中原仁君（医学部6年）

「中枢神経系ミエリン形成の分子機序解明」に関する研究に基づく論文、学会発表および特許取得。First authorの英文原著が5編、論文2編等質量ともにすばらしい業績であった。

岡部高明君（理工学研究科修士2年）・酒井大樹君（理工学研究科修士2年）

栗原宣之君（理工学研究科修士2年）・林 良拓君（理工学研究科修士2年）

藤井飛光君（理工学研究科修士2年）

世界6カ国16チームが参加した、ロボカップ2002世界大会中型ロボットリーグに参加し、日本チーム初の単独優勝をした。

荒川和晴君（政策メディア研究科修士1年）

ゲノム解析ソフトウェア「G-language GAE」を開発し、無料公開。バイオインフォマティクス分野ではもっともメジャーな学会ISMBでも、ISMB Best Poster Awardを受賞した。

<塾長奨励賞>

安孫子悠君（文学部1年）

朝日新聞社主催第41回コンクール・ド・フランセに出場し、表現力、質疑応答も含めて圧倒的支持を得て優勝した。高校からフランス語学習をスタートし、自己研鑽による成果としての優勝が大いに評価を受けた。

都倉武之君（法学研究科修士1年）

福澤諭吉が三河国明大寺村天主教徒自葬事件をめぐるキリスト教と仏教徒との争いに対し、仏教徒を支援したことについては比較的よく知られているが、この事件の決着については、全く不明だった。この事件の基本資料を発見し、「明治十三年・三河国明大寺村天主教徒自葬事件」（慶應義塾福澤研究中心編「近代日本研究」第18巻）を執筆。学部4年生の論文が「近代日本研究」に掲載されたのは同誌発刊以来初めてのことであり、「福澤諭吉書簡集」（慶應義塾編）の編纂にも大きな影響を与えた。

辻収彦君（医学部6年）

アルツハイマー関連細胞死におけるC-Jun N-terminal kinaseの介在を世界で初めて明らかにし、アルツハイマー病における神経細胞死機序解明に貢献。さらに、アルツハイマー関連細胞死を抑制するホメオボックス遺伝子を同定し、それがGtxとして知られた機能未知の神経細胞特異的ホメオボックス遺伝子と同一であることを明らかにした。これらの成果はアルツハイマー病の病態解明と根治的治療法開発に本質的な貢献をするものであった。

山下亜仁香君（総合政策学部4年）

第32回ホノルル市長杯全日本青少年英語弁論大会大学の部に出場し、「世界平和への道」をメインテーマとしてスピーチを行い、見事に優勝。これによりホノルル市長を公式訪問し、国際交流を深めた。

藤本剛君（環境情報学部4年）

短編映像作品「MAILMAN」を自らが監督し、製作を行った。この作品は、NHK等でも全国放送が

なされるなど、様々なメディアで紹介されるだけでなく、Canon Digital Creators Contest2002 デジタルムービー部門で、日本人最高位となるブロンズ賞を受賞した。

平成15年度

< 塾長賞 >

井口拓磨君（経済学部4年）

日吉キャンパスで実施された「ヒヨシエイジ 2003～ヒヨシ地域交流フェスタ～」において、企画・運営の中心となってイベントの成功に多大な貢献をし、日吉行事委員会（HAPP）の学生企画イベント、横浜市民大学講座等の各種企画においてもサウンドディレクションとしてシンセサイザーを使った作曲演奏等により、多くの来場者に驚きと感銘を与えた。これらの諸活動により、地域社会の活性化、慶應義塾と地域社会との連携交流に寄与した。

大場宏幸君（医学部6年）

「神経幹細胞に特異的に発現する転写因子 Sox21 の機能解析」に関する研究を行い、特異的な抗体を用いた手法で哺乳類において Sox21 という転写因子タンパク質が神経幹細胞の多く存在する脳室周囲の細胞層に選択的に発現していること等を世界で初めて明らかにする。これらの研究結果は、中枢神経系の再生医療の研究に大きく貢献し、国際的学術誌「Neuroscience Letters」に投稿、受理されるなどの高い評価を受けた。

< 塾長奨励賞 >

徐燁聡君（平成15年3月商学部卒業）

学部時代に執筆した中国の証券市場の発展と現状を分析する卒業論文を作成し、それが「入門証券中国の証券市場」という経済書の単行本として出版された。

大橋陽平君（医学部6年）

悪性脳腫瘍における癌抑制遺伝子の解析を行い、新規癌抑制遺伝子の同定に成功した。これら一連の活動によって、安田記念医学財団より「癌撲滅に熱意ある医学生」に選出されるなど、脳腫瘍の新しい診断法や治療法の開発のために非常に重要な発見として高い評価を受けた。

佐藤みさき君（総合政策学部4年）・梅木 瞳君（環境情報学部3年）

ゲノム情報解析の研究論文を作成。本論文では、バイオインフォマティクス（計算生物学）の手法を用いて、従来例外的な現象と思われていた遺伝子翻訳のリードスルー（終止コドンの読み飛ばし）という現象が意外に普遍的に起こっている可能性を示した。本研究結果は、国際論文誌「Bioinformatics」誌に掲載されるなどといった形で国内外で高い評価を得た。

平成16年度

< 塾長奨励賞 >

慶應義塾大学公認学生団体 将棋研究会

阿部広之介君（文学部3年）・井元林太郎君（文学部1年）

齋藤優君（経済学部3年）・神谷崇君（経済学部2年）

森本泰介君（経済学部1年）・小川隆君（法学部政治学科4年）

小関健太君（理工学部4年）

第19回全国オール学生将棋選手権団体戦に優勝、また大学生が出場する大会としては将棋界で最も権威のある第35回全日本学生将棋団体対抗戦では準優勝。

塚本絵美君（医学部6年）

初代培養神経細胞と神経細胞株を用いた実験を行い、その研究論文が国際一流紙に計5報発表された。これらの論文に示す成果は、アルツハイマー病の発症機序とその治療法の開発に新たな視点を与えるものとして国内外から高く評価された。

池田祥子君（総合政策学部4年）

SFCにおいて「第1回バリアフリースポーツ大会」の企画立案・運営を行った。大会には約100名（障害者・藤沢市民・SFC生）が参加し、地域との交流を深めた。各種一般紙（朝日・読売・毎日・神奈川の各新聞）にも記事が掲載されるなど、学生が主体となった行事として社会的にも高い評価を受けた。

村上真莉君（環境情報学部3年）

論理力、構成力、プレゼンテーション能力、さらには論題に対する幅広い知識が求められるパラメンタリーディベートで、日本で学生が出場する大会では最大規模である The 6th JPDU Tournament に優勝、Best Speaker（個人成績1位）となった。また、Easter Debating Intervarsity Tournament に日本代表として出場、日本英語交流連盟大学対抗英語ディベートでも準優勝した。

大出雄輔君（理工学研究科修士2年）・加藤真之君（理工学研究科修士2年）

2004年6・7月にポルトガルリスボンで開催され世界8カ国23チームが参加した2004年ロボカップ世界大会における中型リーグにおいて優勝した。両君は本大会で実質的なリーダーとして中心的な役割を果たし、研究と社会活動の両面において学生の範となる大きな成果を挙げたものである。

伊藤ひとみ君（政策メディア研究科修士1年）

高等生物のゲノムだけが持つ重要なシグナル配列を発見し、筆頭著者としての論文が、国際学術誌「RNA」7月号に掲載された。本研究は、バイオインフォマティクス（計算生物学）の手法を用いた選択的スプライシングのメカニズム解明に寄与する大きな手がかりを与えたものである。この成果は、生命科学分野の発展に大きく寄与するものであるとの高い評価を得た。

平成17年度

< 塾長賞 >

八木満君（医学研究科博士課程4年）

大学院入学後一貫して骨代謝の研究に従事し、関節リウマチや癌骨転移時において骨破壊を起こす原因細胞である破骨細胞の融合を制御する分子である DC-STAMP を世界に先駆けて同定した。破骨細胞の融合制御機構の解明は生物学的に重要な現象であり、長年その融合を制御する分子の同定は世界中で競って研究が進められてきた。本研究成果は、国際学術誌に掲載され、表紙に抜粋されると共に、第23回日本骨代謝学会で本塾から初めて全演題から唯一選出される学会奨励賞に選出されるなど、国内外から高い評価を受けた。

林英一君（総合政策学部3年）

インドネシア残留日本兵の研究において、三度の現地調査ならびに日本における取材を実施する中で、「戦後の闇」と言われた歴史に光を当てる貴重な「日記」と「戦闘報告書」を発掘し、学部生としては極めて異例の学会発表や学術雑誌への論文発表を行った。太平洋戦争後アジア各地に残留した日本兵のことについては、資料不足によりこれまであまり学術的な検討がなされていなかったが、戦後インドネシア社会と日本との関係、さらには太平洋戦争の戦後アジア社会における展開の実態などを明らかにするために極めて重要な発掘および研究に寄与し、高い評価を受けた。

浮津弘康君（総合政策学部3年）

ペットボトルリサイクルに際し、キャップやラベルの取り外しが手作業によって行われている事に着目し、これらの作業を自動化する装置を開発、実用化に向けて活動した。また、国内コンテストだけでなく海外コンテストにも参加し、世界大会では三位入賞を果たした。本研究は日本に限らず世界におけるペットボトルリサイクルに大きく貢献し、高い評価を受けた。

< 塾長奨励賞 >

鈴木健太郎君（商学部4年）

進藤桂子君（総合政策学部3年）

日本英語交流連盟（ESUJ）主催の第8回大学対抗英語ディベート大会において優勝した。今大会は、パブリック・コミュニケーションの能力を要求されるパラメンタリー・ディベートにおける規模・水準共に「最高峰の大会」として極めて高く評価されており、他の参加者を大きく引き離しての優勝であった。

SMRG（Sports Management Research Group）の学生（19名）（代表 星出祐輔君（環境情報学部4年）

「スポーツキャンパス」という学生による活動を推進力として、「地域のスポーツ組織（スポーツ少年団・中高部活動）」、「大学スポーツ組織（体育会）」、「地域の諸団体（自治体・企業・商店街・自治会など）」が協働で企画・開催する半学半教型のスポーツ教室の実践モデルを考案し、平成17年度に6

回開催した。この実践的な社会活動は、大学や大学スポーツによる地域交流の新しいアプローチを提示・実践したのみならず、慶應義塾も含めた地域諸団体の連携や関係性を深め、地域社会活動の活性化にも大きく貢献した。

松本隆史君（政策・メディア研究科博士課程1年）

メディア・デザインの研究領域における人間中心のマルチ・メディア・インタラクションのインターフェースを海外長期インターンシップ等で研究し、成果としての複数の作品（電子付箋システム Post-Bit, Z-agon 等）が、国際学会での受賞・国内外メディアへ掲載される等国際的に高い評価を受けた。

平成18年度

< 塾長賞 >

丸山健太君（医学部5年）

骨免疫学分野の研究において骨代謝系が自然免疫系を制御している一面を明らかにし骨自然免疫学という新規学際分野を提唱した。この研究成果は感染症や免疫疾患の新たな治療法開発に寄与するものとして、国際誌（The Journal of Immunology 等）に3報の筆頭著者論文として掲載された。また、日本学生支援機構 平成18年度優秀学生顕彰事業「大賞」を受賞するなど、国内外で高い評価を受けた。

速水浩平君（政策メディア研究科修士課程1年）

振動のエネルギーを利用した新しい発電システム（「床発電」等）を発明し東京駅の改札口にて実証実験を行うなどその実用化に向けて活動した。また国内コンテストだけでなく海外コンテストにも参加し、世界大会であるテキサス大学主催の Idea to Product Global Competition において Kelleher Chair in Entrepreneurship Challenge にて3位を受賞した。この取り組みは世界における「環境問題」や「エネルギー問題」の解決策のひとつとして高い評価を受けた。

< 塾長奨励賞 >

手塚雄佑君（商学部4年）

入学後四年間にわたり全国各地の社会福祉施設（老人ホーム、児童福祉施設、病院、障害者授産施設等）を訪問し落語の口演および音楽の演奏によるボランティア活動に積極的に取り組み訪問施設数は160にもものぼる。その顕著な活動実績は社会貢献に大きく資するものである。

勝本雄一朗君（政策メディア研究科博士課程1年）

メディア芸術作品の創作に積極的に取り組み、作品「In Scene」がヨーロッパ最大規模のヴァーチャルリアリティ関連イベントであるフランス Laval virtual Award 2006 において Art and Culture Award を受賞した。また作品「雨刀」が平成18年度文化庁メディア芸術祭（国内外から1808作品が応募）においてエンターテインメント部門（361作品が応募）で奨励賞を受賞した。それぞれ国際コンペティションでの受賞という世界を舞台にして優れた成果を残した。

渡邊由香君（政策メディア研究科修士課程1年）

動物の新規マイクロRNAを発見しその細胞内機能を実験で確認した。その研究成果が国際学会である17th International Conference on Genome Informaticsにおいて2006 Oxford Journals JSBi Prizeを受賞した。これは165の演題の中から選出される唯一の賞である。この非常に名誉ある賞を修士一年生が受賞したことは特筆に値する。

平成19年度

< 塾長賞 >

小山裕幾君（理工学部2年）

フルート奏者としての音楽活動が高く評価され、将来を嘱望されるクラシック音楽家に贈られる第17回出光音楽賞を受賞し、新潟県知事表彰を受けた。理工学部にて在学しながら日本を代表するフルート奏者として広く活躍しており、その文化芸術活動における顕著な実績は高い評価を受けた。

関根雅人君（環境情報学部4年）

メディアアート作品シリーズ「ene-geometrix」により、第13回学生CGコンテスト インタラクティブ部門において最優秀賞を受賞し、応募作品123点の頂点に立った。また、同作品はヨーロッパ

で開催される世界最高峰のメディアアートの祭典である ARS Electronica center Permanent exhibition の常設展示に採択され、いずれも学部生としては稀有な業績であり、国外においても高い評価を受けた。

笹部潤平君（医学研究科博士課程4年）

運動神経の変性により起こる難病である筋萎縮性側索硬化症において、アミノ酸の一種が増加することが疾患の増悪因子になり得ることを世界に先駆けて発見し、国際誌（The EMBO Journal）に掲載された。この研究成果は、新規治療薬開発に大きく寄与するものであり、他の神経疾患にも適応され得るものとして国内外から高い評価を受けた。

< 塾長奨励賞 >

蓮村俊彰君（環境情報学部4年）

入学以降一貫して創作活動に取り組む一方、広大なフィールドワーク、芸術活動、IT技術を融合した、単独世界一周取材旅行プロジェクトを敢行し、10万枚を超える写真を撮影した。創作のみならず、プロジェクトのマネジメントまでを一貫して行ってきたことは、開拓精神に溢れ社会的に高い評価を受けた。